

## ツバメから考えたこと

春になってツバメが飛来しているのが、見られるようになってきました。このツバメですが、どこから来るか知っていますか？実は、3月上旬頃に東南アジアなどから日本各地に飛来し始め、4月頃の繁殖期を経て9～10月頃まで暮らし、戻っていきます。巣を作ったり古巣を補修したりして、子育ては4月末から始まります。知り合いの方の自宅には、以前ツバメの巣があったそうですが、カラスに襲われて巣が無くなったそうです。しかし、毎年ツバメがやって来ては、しばらく滞在した後に、大声で鳴いて挨拶をして飛び去って行くという話を聞きました。このように最近は、巣作りも深刻で、巣を架けられる場所がどんどん減っているのです。最近の建物は、外壁が汚れにくい素材が使われることが多く、泥が付きにくくなっていて、巣も架け辛いそうです。一生懸命泥を付け、何とか巣を架けられても、育雛の途中で自然落下してしまう事もあります。ツバメは外敵のカラスやヘビに襲われないように、人間の生活圏に巣をかけるのです。



一昔前は、ツバメの巣作りは、農家の人たちにとっては、たいへん喜ばしいことでした。ツバメのエサである生きた昆虫や幼虫は、農作物にとって有害なものなので、ツバメが食べてくれることで駆除する手間が省けたのです。そこからツバメは益鳥として古くから大事にされてきました。その歴史は古く、奈良時代の和歌集「万葉集」において、ツバメは春の訪れを告げる鳥として書かれています。いつしか、ツバメが巣を作る家には幸せが訪れるともいわれ、ツバメは縁起がよい鳥として知られるようになったのです。しかし、近年では農薬の発達により、ツバメのエサとなる虫は減少しています。その影響でツバメの姿も少なくなってきました。昔は当たり前だった光景が少なくなっていくのは寂しいものがあります。かつてはツバメの存在に助けられていた人間ですので、これからは共に過ごしていけるにはどうすればよいかを、私たちの周りにある自然環境を見つめ直しながら考えていきたいですね。

## 「こどもの日」の子供の人口減少

総務省が4日公表した人口推計(4月1日現在)によると、子供(15歳未満)の人口は1401万人で過去最少を更新したそうです。前年同時期より33万人少なく、43年連続の減少。総人口に占める子どもの割合は11.3%で50年連続の低下となっています。3歳ごとの年齢層別では、年齢が下がるほど減少し、12～14歳が317万人に対して、0～2歳は235万人と大きく減少しています。人口4000万人以上の37カ国における子どもの割合比較では、日本(11.3%)はワーストの韓国(11.2%)に次いで下から2番目です。アメリカ(17.7%)やドイツ(14.0%)など欧米各国のほか、中国(16.8%)とも差がついているのです。

子供の人口減少は、教育と大きく関係あります。教育界では、これからも目の前の子供たちの成長について真摯に向き合っていきたいと思えます。しかし、この人口減少に関しては社会や政治がもっと真剣な議論と具体的で効果的な対策を講じないと、日本の未来は語れないと考えます。

